ISSN 2434 − 4516

愛南町文化財調査報告書第１輯

愛南町内遺跡 1

- 国史跡伊予遍路道観自在寺道
- 平成29年度町内遺跡試掘確認調査

2020.2

愛媛県南宇和郡愛南町教育委員会

国史跡伊予遍路道観自在寺道

予土国境石造物（愛南町指定史跡「松尾峠の境界石標」）

愛南町内遺跡 1

・国史跡伊予遍路道観自在寺道
・平成29年度町内遺跡試掘確認調査

2020.2

愛媛県南宇和郡愛南町教育委員会

序

弘法大師、またはお大師さんとして親しまれてきた空海ゆかりの四国八十八箇所霊場とそれを巡る遍路道は、古くより僧侶や修験者の修行の場でした。

その修行の場が、江戸時代以降、四国遍路として広く庶民に親しまれるようになり、現代まで引き継がれています。

特に近年、四国八十八箇所霊場と遍路道を世界遺産として登録しようとする動きが活発になる中で、実際に歩いて巡礼される方が増えると共に、欧米やアジアなど、世界各地から四国遍路を訪れる方が徐々に多くなってきました。

愛南町としては、これら遍路道並びに霊場の保全と維持そして世界遺産登録を目指すことを目標に、遍路道の中でもその歴史と文化を色濃く残すものを優先して地道な調査と研究を進め、まずは「構成資産の保護措置」として、国史跡としての指定を受けるべく、文化財保護業務に取り組んでいます。

また愛南町には、平成30年10月15日付で国史跡として指定を受けた伊予遍路道観自在寺道の先にある遍路道をはじめ、縄文時代後期の平城貝塚や、幕末の開国圧力にいち早く反応した宇和島伊達家が高野長英に設計させた台場跡など、価値の高い文化財が数多く所在しております。当町は、これら文化財を保護し、未来の世代に残すため、そして愛南町の未来の礎とするため、その保護と活用に取り組んでまいります。

末尾になりましたが、本書の刊行まで様々な形でご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げると共に、本書が愛南町の文化財と歴史への理解と関心の醸成、そして町の来し方行く末を正しく理解していくための基礎資料としての活用に繋がれば、幸いに存じます。

令和2年2月28日
愛南町教育委員会
教育長　中村　維伯

例言

1. 本報告書は、愛南町教育委員会が平成29年度に実施した、国史跡伊予遍路道観自在寺道（通称“松尾坂”ないしは“松尾峠”）の調査と、町内遺跡試掘確認調査に関する報告書である。
平成30年度に作成を開始し、平成31（令和元）年度に本報告書を刊行した。

2. 所在地　国史跡伊予遍路道観自在寺道
愛媛県南宇和郡愛南町小山1359番２と1777番３に挟まれ、同1430番と2158番に挟まれるまでの道路敷並びに同2157番と2158番
平成29年度町内遺跡試掘確認調査
増田 2045-1, 2046, 2047-1, 2048-1, 2049, 2054, 2055, 2056-1, 2057-1, 2058, 2059, 2060, 2061, 2062, 2065, 2113, 2114, 2115, 2116, 2117, 2118, 2119-1, 2158-1, 2159-1, 2160-1, 2161-1, 2162-1, 2163, 2164, 2165, 2166, 2167, 2168, 2169, 2178, 2179
御荘平城 1257-3
御荘深泥 348-1 ～ 3, 397-4
御荘深泥 622-1
御荘深泥 252-1

3. 調査地面積　国史跡伊予遍路道観自在寺道
3,993.51 ㎡
平成29年度町内遺跡試掘確認調査

増田 2045-1 他	16,710㎡
御荘平城 1257-3	219.7㎡
御荘深泥 622-1	2,900㎡
御荘深泥 348-1 ～ 3 他	2,900㎡
御荘深泥 252-1	1,697㎡

4. 調査期間　国史跡伊予遍路道観自在寺道
地形測量調査　平成29年５月２日から同年７月31日まで
試掘確認調査　平成29年５月11日から同年５月31日まで
平成29年度町内遺跡試掘確認調査

増田 2045-1 他	平成29年４月24日と25日
御荘平城 1257-3	平成29年５月19日
御荘深泥 622-1	平成29年７月25日
御荘深泥 348-1 ～ 3 他	平成29年７月26日
御荘深泥 252-1	平成29年９月13日

5. 愛南町の文化財保護行政に係る体制

愛南町教育委員会　生涯学習課　文化振興係

平成29年度	教 育 長	中村　維伯
	課　　長	本多　幸雄
	課長補佐	織田　浩史
	係　　長	松本安紀彦
	臨時職員	吉田　貴子
平成30年度	教 育 長	中村　維伯
	課　　長	清水　雅人
	課長補佐	織田　浩史
	係　　長	松本安紀彦
	臨時職員	吉田　貴子
平成31年度	教 育 長	中村　維伯
（令和元年度）	課　　長	清水　雅人
	課長補佐	織田　浩史
	係　　長	松本安紀彦
	臨時職員	吉田　貴子

6. 国史跡伊予遍路道観自在寺道の測量は、株式会社八紘設計コンサルタント（愛南町）に委託した。また、その試掘確認調査には、浅山勝忠･嘉新隆･谷岡久則･東峯章･本多豊博の協力を得た。

7. 本書の執筆と編集は、松本が行なった。

8. 国史跡伊予遍路道観自在寺道の試掘確認調査で得られた遺物については、17MTO と注記し、一本松郷土資料館で保管している。

目　次

本文

第Ⅰ章　国史跡伊予遍路道観自在寺道 1
1. 調査に至る経緯
2. 調査の対象
3. 調査の方法
4. 遺跡周辺の地理的歴史的環境
5. 調査報告
6. 総括
第Ⅱ章　平成29年度町内遺跡試掘確認調査 15
1. 増田 2045-1 他
2. 御荘平城 1257-3
3. 御荘深泥 348-1～3 他
4. 御荘深泥 622-1
5. 御荘深泥 252-1

挿図

Fig.1　国史跡伊予遍路道観自在寺道　所在地図 2
Fig.2　愛南町内遺跡　位置図 4
Fig.3　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量全体平面図 ..... 5・6
Fig.4　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 1 7
Fig.5　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 2 8
Fig.6　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 3 9
Fig.7　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 4 10
Fig.8　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 1 ～ 5 位置図 11
Fig.9　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 1 平面及び土壌堆積図 12
Fig.10 国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 2 平面及び土壌堆積図 12
Fig.11 国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 3 平面及び土壌堆積図 13
Fig.12 国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 4 平面及び土壌堆積図 13
Fig.13 国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 5 平面及び土壌堆積図 14
Fig.14 増田 2945-1他　位置図 15
Fig.15 増田 2945-1他　試掘坑位置図 15
Fig.16 増田 2945-1他　試掘坑土壌堆積図 1 16
Fig.17 増田 2945-1他　試掘坑土壌堆積図 2 17
Fig.18 増田 2945-1他　試掘坑土壌堆積図 3 18
Fig.19 御荘平城 1257-3　位置図 19
Fig.20 御荘平城 1257-3　試掘坑位置図 19

Fig.21 御荘平城 1257-3　試掘坑土壌堆積図 19
Fig.22 御荘深泥 348-1 他　位置図 20
Fig.23 御荘深泥 348-1 他　試掘坑位置図 20
Fig.24 御荘深泥 348-1 他　試掘坑土壌堆積図 20
Fig.25 御荘深泥 622-1　位置図 21
Fig.26 御荘深泥 622-1　試掘坑位置図 21
Fig.27 御荘深泥 622-1　試掘坑土壌堆積図 22
Fig.28 御荘深泥 252-1　位置図 23
Fig.29 御荘深泥 252-1　試掘坑位置図 23
Fig.30 御荘深泥 252-1　試掘坑土壌堆積図 1 23
Fig.31 御荘深泥 252-1　試掘坑土壌堆積図 2 24

表

1. 愛南町内遺跡一覧 4

写真図版

PL.1　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡試掘確認調査　着手前（高知県側より）
国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡試掘確認調査　着手前（愛媛県側より）
PL.2　国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 1 完掘・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 1DA 間土壌堆積・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 1DA 間土壌堆積
PL.3　国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 2 完掘・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 2AB 間土壌堆積・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 2DA 間土壌堆積
PL.4　国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 3 完掘・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 3AB 間土壌堆積・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 3 調査風景
PL.5　国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 4 完掘・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 4BC 間土壌堆積・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 4BC 間土壌堆積近接
PL.6　国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 5 完掘・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 5AB 間土壌堆積・国史跡伊予遍路道観自在寺道茶屋跡試掘坑 5DA 間土壌堆積
PL.7　国史跡伊予遍路道観自在寺道　試掘確認調査採集　ガラス製品（薬瓶　銘“高知病院”）
PL.8　増田 2045-1 他　調査着手前風景 1・増田 2045-1 他　調査着手前風景 2・増田 2045-1 他　試掘坑 1 土壌堆積・増田 2045-1 他　試掘坑 9 土壌堆積・増田 2045-1 他　試掘坑 10 土壌堆積・増田 2045-1 他　試掘坑 13 土壌堆積・増田 2045-1 他　試掘坑 17 土壌堆積・増田 2045-1 他　試掘坑 25 土壌堆積
PL.9　御荘平城 1257-3　試掘確認調査着手前風景・御荘平城 1257-3　試掘坑土壌堆積・御荘深泥 348-1 他　試掘坑 1 土壌堆積・御荘深泥 348-1 他　試掘坑 2 土壌堆積・御荘深泥 622-1　立地風景・御荘深泥 622-1　試掘坑 1 土壌堆積・御荘深泥 622-1　試掘坑 2 土壌堆積・御荘深泥 622-1　試掘坑 3 土壌堆積
PL.10　御荘深泥 252-1　試掘坑 1 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 2 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 3 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 4 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 5 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 6 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 7 土壌堆積・御荘深泥 252-1　試掘坑 8 土壌堆積

第Ⅰ章　国史跡伊予遍路道観自在寺道

１．調査に至る経緯

「四国八十八箇所霊場と遍路道」を世界遺産として登録することを目指す取り組みは、平成18年度から始まった。その後、霊場及び遍路道が所在する四国４県と市町村が主体となって進められており、愛媛県では霊場に関する調査は県が、遍路道に関する調査は市町が行うこととなっている。

平成18年度の時点において、四国４県は文化庁に対し、「四国八十八箇所霊場と遍路道」が世界遺産暫定一覧表に追加することが適当であると判断される文化資産として提案したが、継続審議となった。平成19年には、四国４県と関係58市町村が共同で再提案を行なっている。

平成20年の国文化審議会文化財審議会において、世界遺産登録暫定一覧表への記載は見送られたが、「生きている伝統」を表す資産として価値が高いという評価を受けた。この時に、「提案書の基本的主題を元に、地方公共団体を中心に作業を進めるべきもの」として、カテゴリーⅠａに位置付けられている。この時の課題として、「四国八十八箇所霊場と遍路道」の構成資産のほとんどが文化財として保護の対象となっていないだけでなく、その種類も多岐にわたることから、指定や選定等の保護措置を講じる取り組みが必要であることが挙げられた。

このため四国４県では、札所とそれを構成する資産そして遍路道の保護措置について検討するための会議を定期的に開催して、「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界文化遺産登録に向けて取り組みを進めている。

愛南町は、この取り組みにおける町としての役割を果たすべく、平成29年度に松尾峠の調査を実施し、意見具申の後、平成30年10月15日に伊予遍路道観自在寺道として国史跡の指定を受けた。

２．調査の対象

調査の対象としたのは、愛媛県と高知県の境である松尾峠から、愛媛県側のおおよそ1.5kmの範囲である。道とその両脇5m について地形測量を行なった他、峠近くに所在した茶屋の性質と道との関係性を探るための試掘確認調査を実施した。

３．調査の方法

地形測量は、ＧＮＳＳ観測（スタティック法）により３級基準点を４点、主に観測に使用した４級基準点は、山間部においてもＧＰＳ衛星の受信がしやすく、短時間での観測が可能なネットワーク型ＲＴＫ－ＧＰＳ測量（ＶＲＳ方式）で設置し、観測を行った。その後、トータルステーションと電子平板を使用して測量を進め、 500分の１で図化した。地形測量の他、発掘調査を実施した地点と石造物の位置について記録した。尚、基準とした座標系は４系であって、座標系の原点の経緯度は、東経133度30分０秒、北緯33度０分０秒である。

試掘確認調査は、茶屋の成り立ちを探ることを目的に３箇所の地点を調査した他、その広がりと道との関係性を探るべく２箇所の地点を調査した。いずれの地点も、平面図と四方の土壌堆積図を20分の１で作成した。

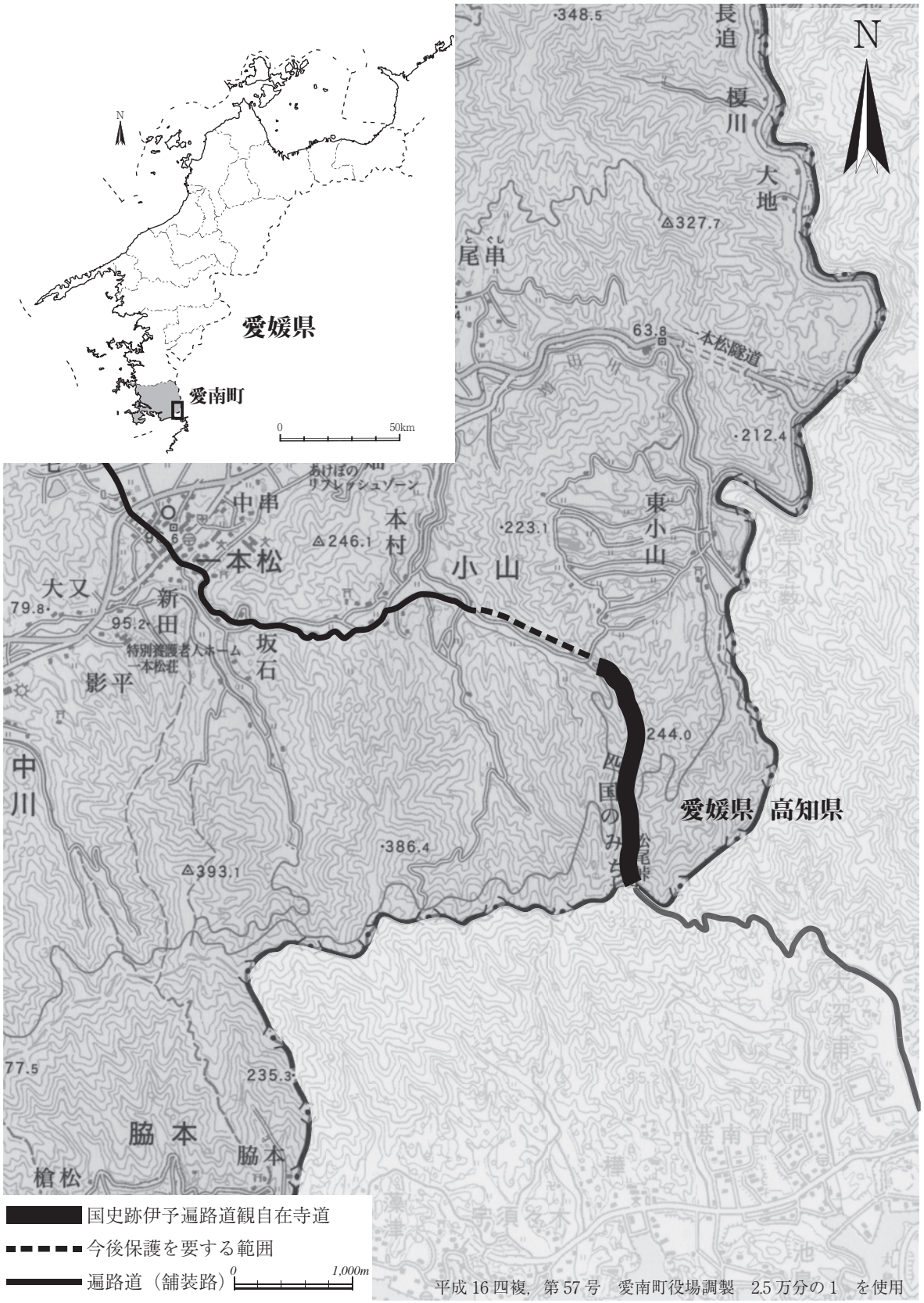


Fig.1　国史跡伊予遍路道観自在寺道　所在地図

４．遺跡周辺の地理的歴史的環境

観自在寺道は、「修行の道場」と呼ばれる土佐遍路道の最後の霊場である第39番札所延光寺と、「菩薩の道場」と呼ばれる伊予遍路道の最初の霊場である第40番札所観自在寺の間に所在する道である。平成29年度に調査を行ったのは、愛媛県愛南町小山から高知県宿毛市小深浦までの山道のうち、松尾峠から愛媛県側の 1,544.2 mの区間である。

この山道は、四国西南地域において、愛媛県と高知県の境に所在する山のうち、宇和島市に山頂を持つ三本杭（1,225.72m）に次ぐ標高を有する篠山（1,064.6m）から日向灘方面に伸びる山地のほぼ先端にあたる部分に所在している。地質学の観点からは、四万十帯北帯と南帯の境界部分であって、近くには安芸構造線という断層が所在する。

この山道の峠の最高標高は約 310 mを測り、伊予遍路道の起点として位置付けられ、古くから松尾坂ないしは松尾峠と呼ばれてきた。そしてこの道は、古来より四国西南地域における伊予土佐間の主要な往還道としての機能を有していた可能性が、地誌などで指摘されている。

その証左の一つとして、古くは戦国時代末期に、観自在寺道が所在する小山の北側の山を越えた所の、広見と増田の境に所在する丘陵上に築かれた猿越城が挙げられる。猿越城は、現在の愛南町のほぼ全てを手中に収めていた御荘氏が築いた山城であって、その頃の御荘氏は、土佐の長宗我部氏の侵攻にさらされていた。

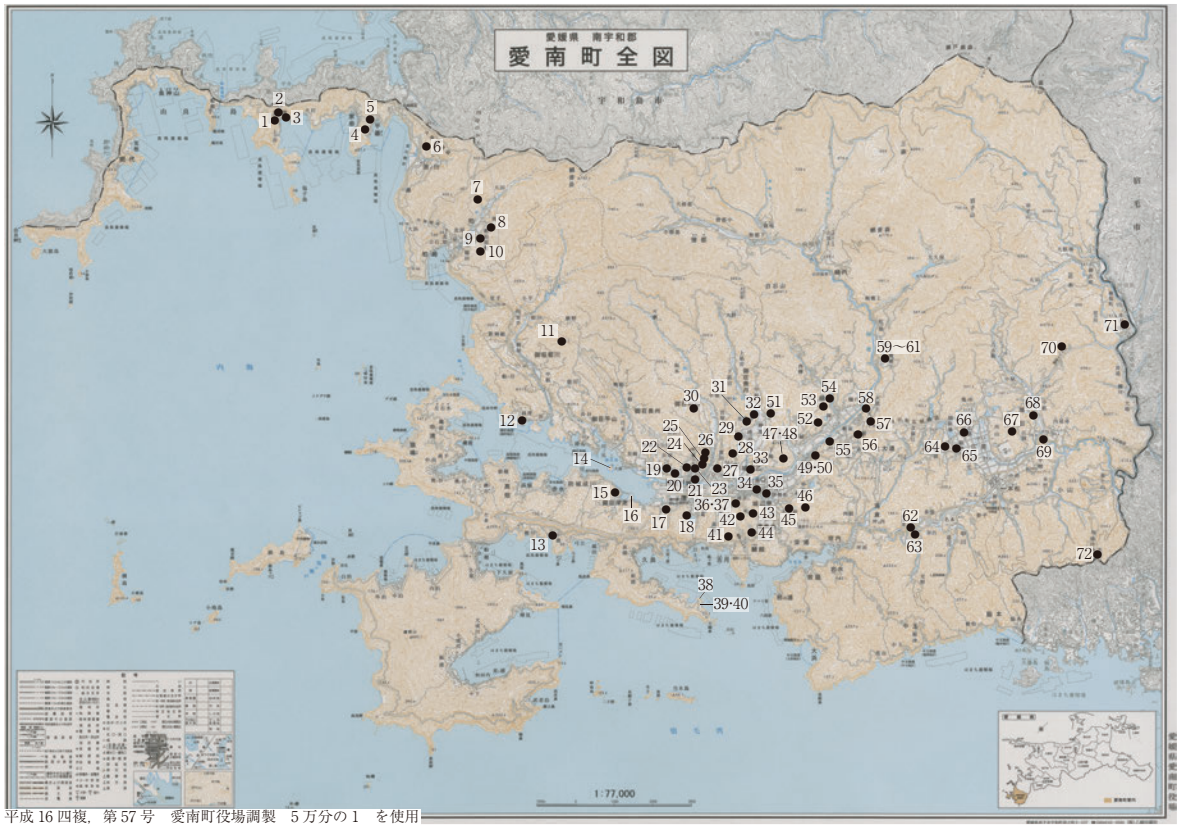
この城は、東西二つの砦で構成されており、南つまり松尾峠を越えて土佐側から押し寄せる敵勢に対して、両手を広げて迎え撃つような構造をしている。竪堀や堀切などの防禦施設が砦の南に集中する傾向があるため、南からの侵攻を妨げる意図があって作られたことが分かる。そして竪堀については、長宗我部氏との関係の中で構築された可能性が高く、南予地方と土佐との交流を示すものとして理解できる。

さて、この峠には領界石が据えられており、「従是西伊予國宇和島藩支配地」と刻まれている。一般的に領域を示すにおいて、藩という文字が使われたのは明治時代初頭であることから、この領界石が据えられたのはその頃として判断できる。また、麓の小山集落には、峠に据えられていた２基の領界石が遍路石と共に立っており、それらには「従是西伊豫國宇和島領」と刻まれている。これには藩という表現が無いため、現在峠に据えられているものよりも古いものと判断できる。

これに対して、高知県側においても「従是東土佐國」と刻んだ領界石が据えられており、江戸時代以降この峠については、伊予土佐間において領界を強く意識し合う場であったことは疑う余地がない。これは、この道が交通の要衝であったことを示唆するものである。また、この峠のそれぞれの麓に番所が設置され、その役割について事細かに記録されたものが現代に伝わっていることからもうかがえる。

そして、この峠については、景勝地としても高く評価されている。四国遍路が盛んになった江戸時代以降において、松尾峠から宿毛湾を臨む風景は秀一であるとして、幾つかの紀行文に記されている。後に蝦夷地を“北海道”と命名することとなる松浦武四郎は、17歳の時に四国遍路に赴いており、ここ松尾峠の他、四国遍路の道中の名所を絵図に残している。

宿毛湾は、太平洋戦争敗戦まで大日本帝国海軍の泊地であった。このため、艦隊が停泊した時は麓の住民が松尾峠に登ってその姿を眺めたという。また戦時中には、この峠に生えていた松を伐採し、松根油を採取したという記録も残っている。



平成16四複，第57号　愛南町役場調製　5万分の1　を使用

Fig.2　愛南町内遺跡　位置図

番号	名称	番号	名称	番号	名称	番号	名称
1	五輪墓跡（油袋342）	21	平城貝塚	41	鳶の巣城跡	61	梶郷駄場３遺跡
2	五輪墓跡（油袋515）	22	猪ノ尻遺跡	42	大谷の砦跡	62	茶堂Ⅱ遺跡
3	五輪墓跡（油袋369）	23	岡村松軒翁の墓	43	大森城跡	63	茶堂遺跡
4	白王山遺跡	24	法華寺遺跡	44	太郎谷砦跡	64	札掛遺跡
5	本谷しく様遺跡	25	日枝神社遺跡	45	一夜城跡	65	駄場遺跡
6	法華石城跡	26	日向谷遺跡	46	不老の砦跡	66	広見遺跡
7	鳥巣城跡	27	永の岡遺跡	47	愛宕山遺跡	67	猿越城跡
8	小山畑遺跡	28	源駄場遺跡	48	御陣山城跡	68	ナカシマ遺跡
9	矢落遺跡	29	大谷遺跡	49	数城跡	69	段ノ上遺跡
10	串ヶ岡城跡	30	和口西の駄場遺跡	50	御荘焼窯跡（豊田）	70	峠の城跡
11	風ヶ森城跡	31	安住寺五輪塔	51	御荘焼窯跡（長月）	71	ムソノ城跡
12	銭坪遺跡	32	永月城跡	52	御荘焼窯跡（一木）	72	伊予遍路道観自在寺道
13	小浦墓地（五輪塔群）	33	三島岡遺跡	53	緑城跡		
14	大島遺跡	34	常盤城跡	54	御荘焼早崎窯跡		
15	深泥Ⅱ遺跡	35	城辺小学校校庭遺跡	55	緑当時遺跡		
16	深泥遺跡	36	久保遺跡	56	太場遺跡		
17	馬瀬遺跡	37	鳥越遺跡	57	ホリキリ		
18	節崎遺跡	38	高野長英築造の台場跡	58	大道下遺跡		
19	貝塚遺跡	39	天嶬の鼻砲台場石塁	59	梶郷駄場１遺跡		
20	八幡野遺跡	40	天嶬の鼻遺跡	60	梶郷駄場２遺跡		

表１　愛南町内遺跡一覧

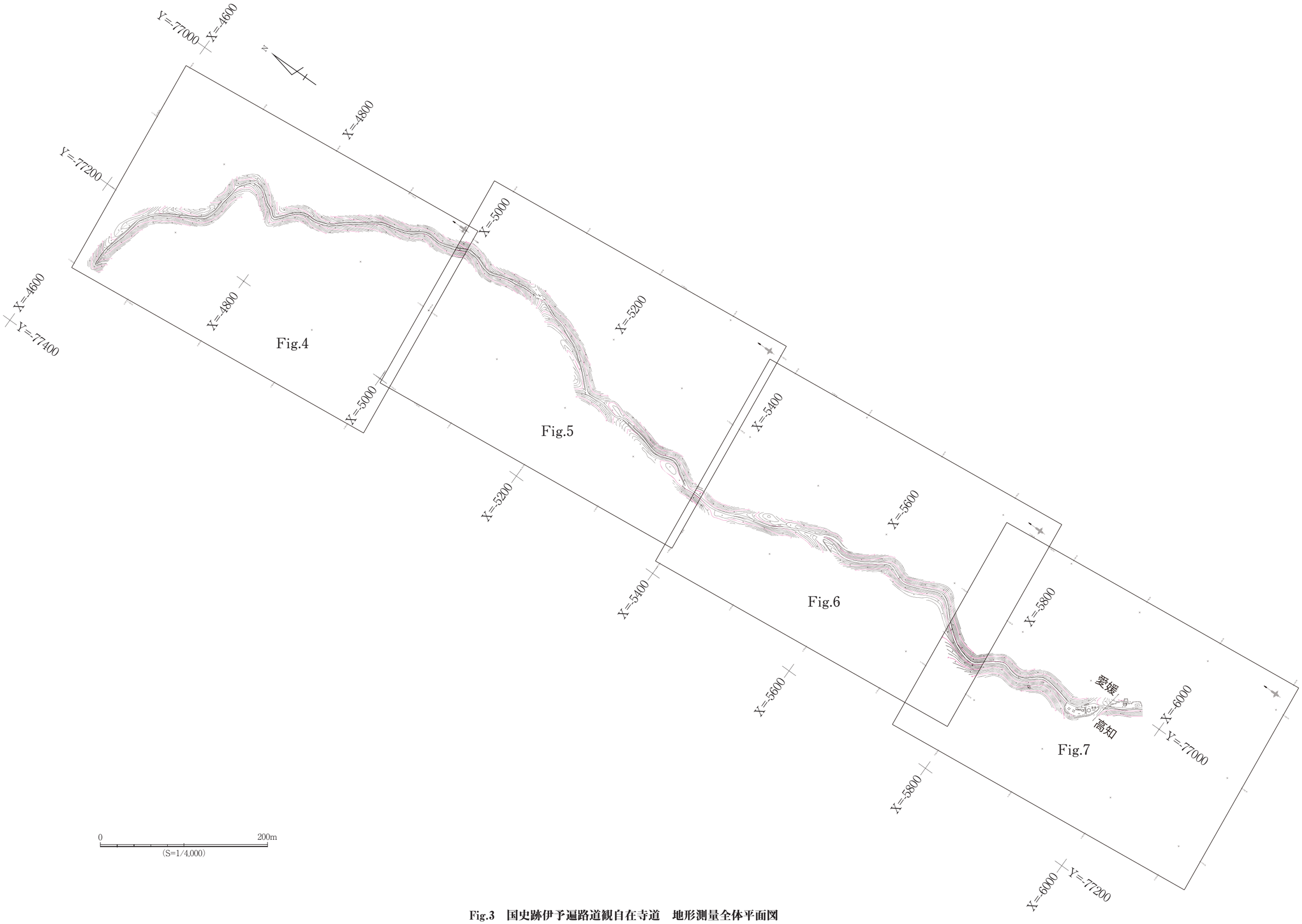


Fig.3　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量全体平面図

5．調査報告

伊予遍路道観自在寺道は、峠を越えて尾根筋を辿りながら、小山の集落へと緩やかに降る道である。この道は、明治37年に大日本帝国陸地測量部が実施した測量による地図「宿毛」に記載されており、この頃には既に伊予土佐間の主たる往還道として認識されていたものとして理解できる。

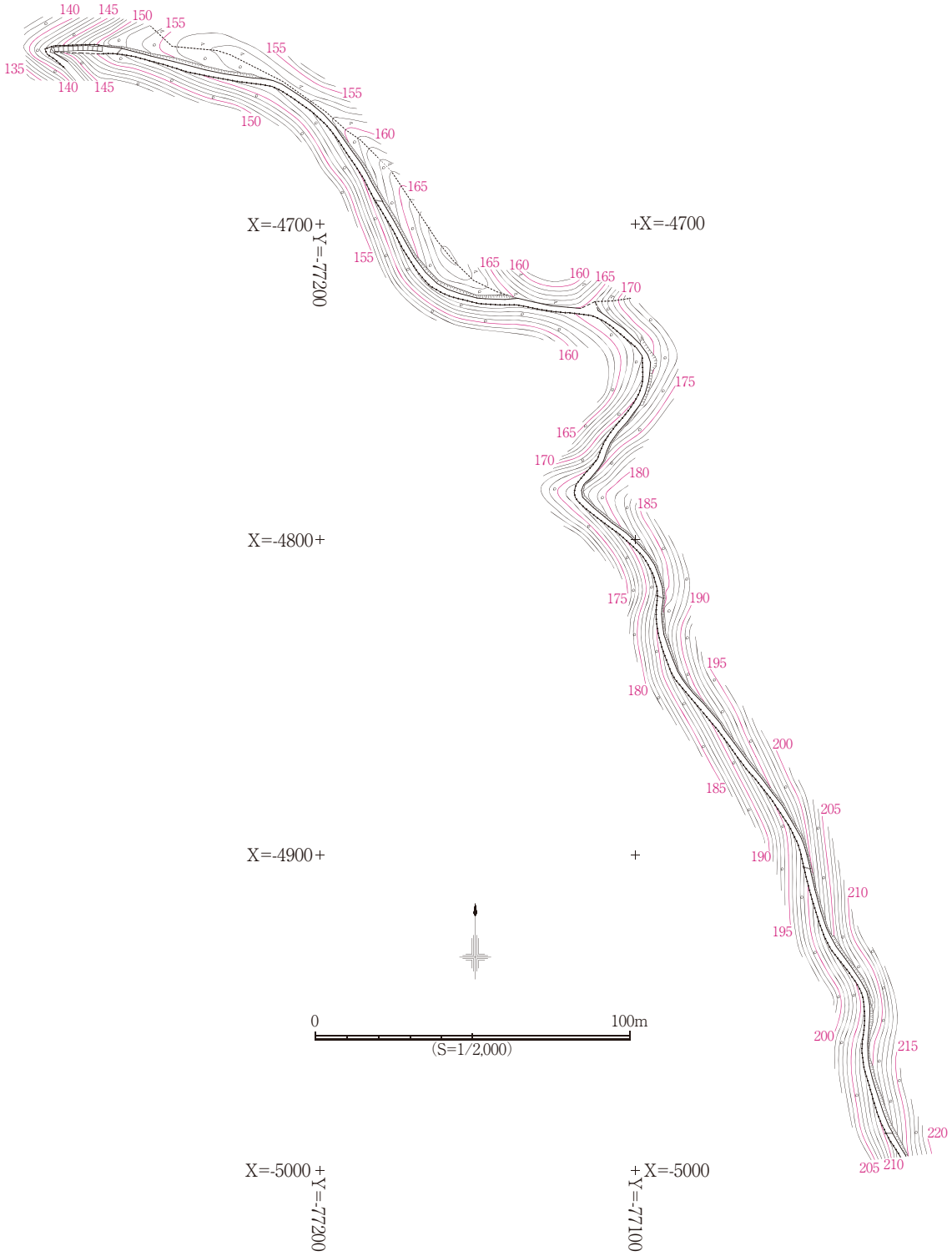


Fig.4　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 1

しかしそれ以前は、現在の道とは別に西の尾根道があり、かつてはそこが県道として指定され、地元が桜の植樹等の管理を行なっていたことが分かっている（明治 14 年愛媛県行政文書）。

Fig.5　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 2

西の尾根道から現在の道への変遷は、運搬に荷車を使用するようになった等の物流様式の変化が影響していると考えられ、この道が伊予土佐間の主な物流経路であったとして理解できる。

Fig.6　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 3

このことは、峠の高知県側と愛媛県側に茶屋があったことからも推察することができる。このため、地形及び道の測量調査と合わせて、愛媛県側の茶屋跡について試掘確認調査を行なった。

Fig.7　国史跡伊予遍路道観自在寺道　地形測量図 4

調査着手時点での茶屋跡は、礎石と考えられる石列、そこで使用されたものとして考えられる瓦や陶磁器の破片の散布が確認できていた。また、地形を観察するに、傾斜の急な東斜面に平場が作られており、平場の西に所在する切岸状の地形は、その造成に伴う可能性が考えられた。

このため、石列が茶屋の礎石であることの確認、そして茶屋があったとされる平場の成り立ちと道との関係を明らかにすること、そして切岸状の地形で生じた残土の処理を確認すること、の３点に調査の方針を絞り、調査を進めた。

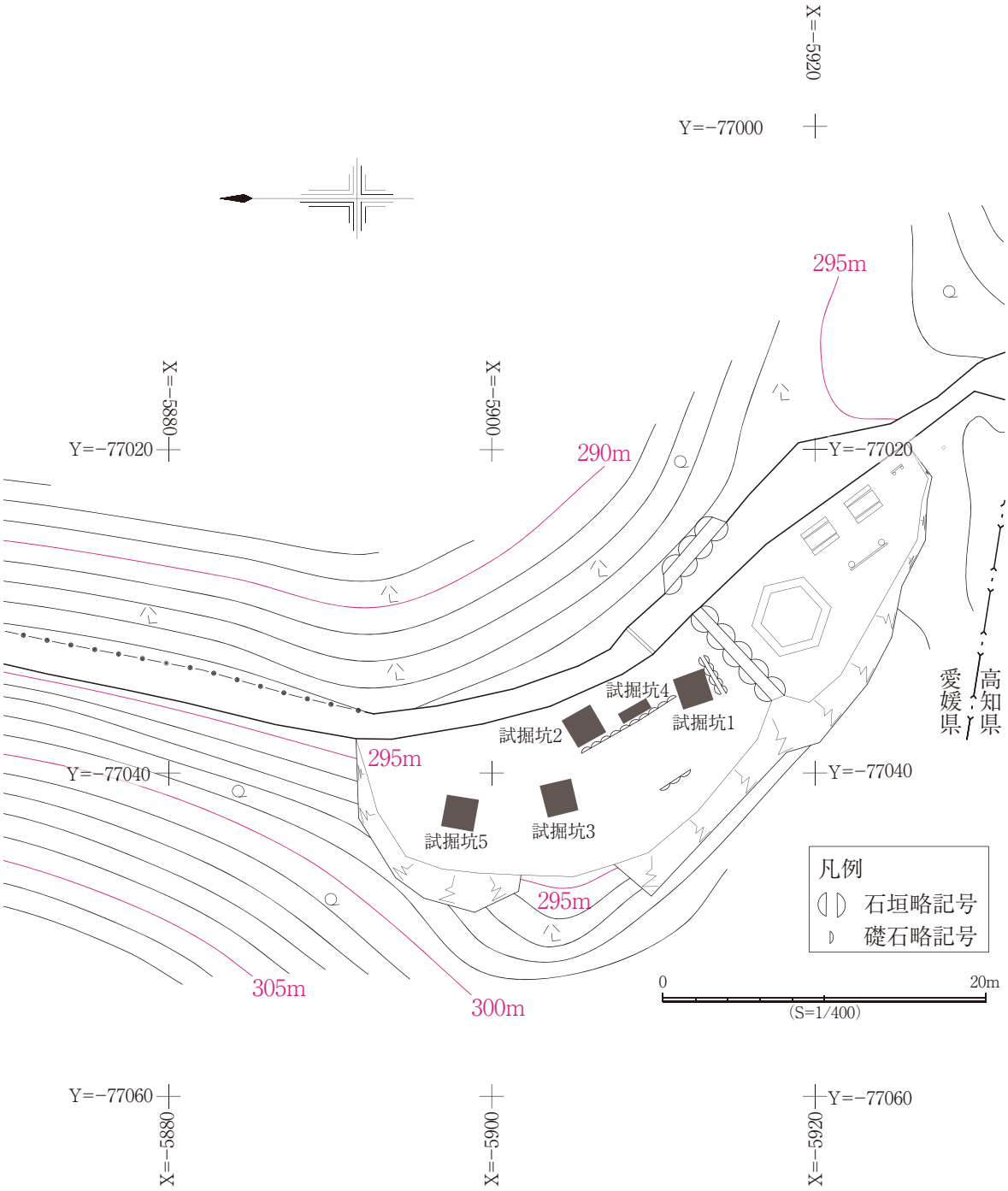


Fig.8　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑１～５位置図

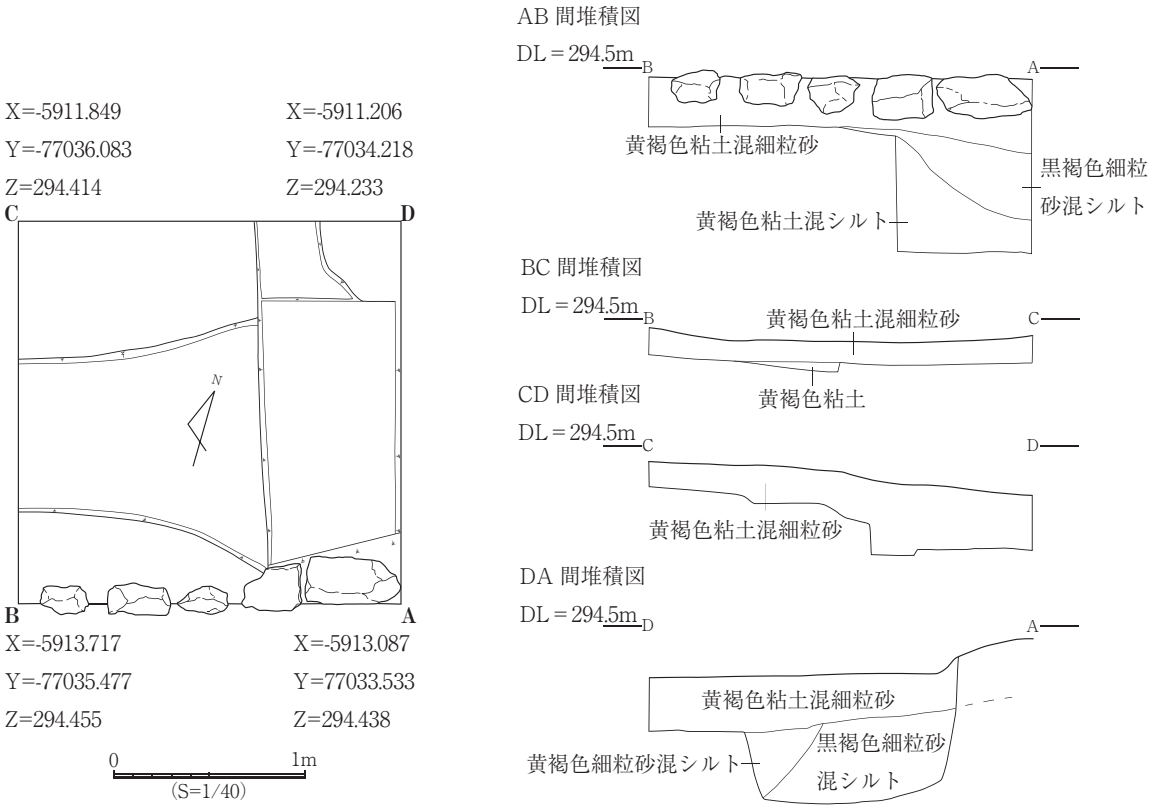


Fig.9　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 1 平面及び土壌堆積図

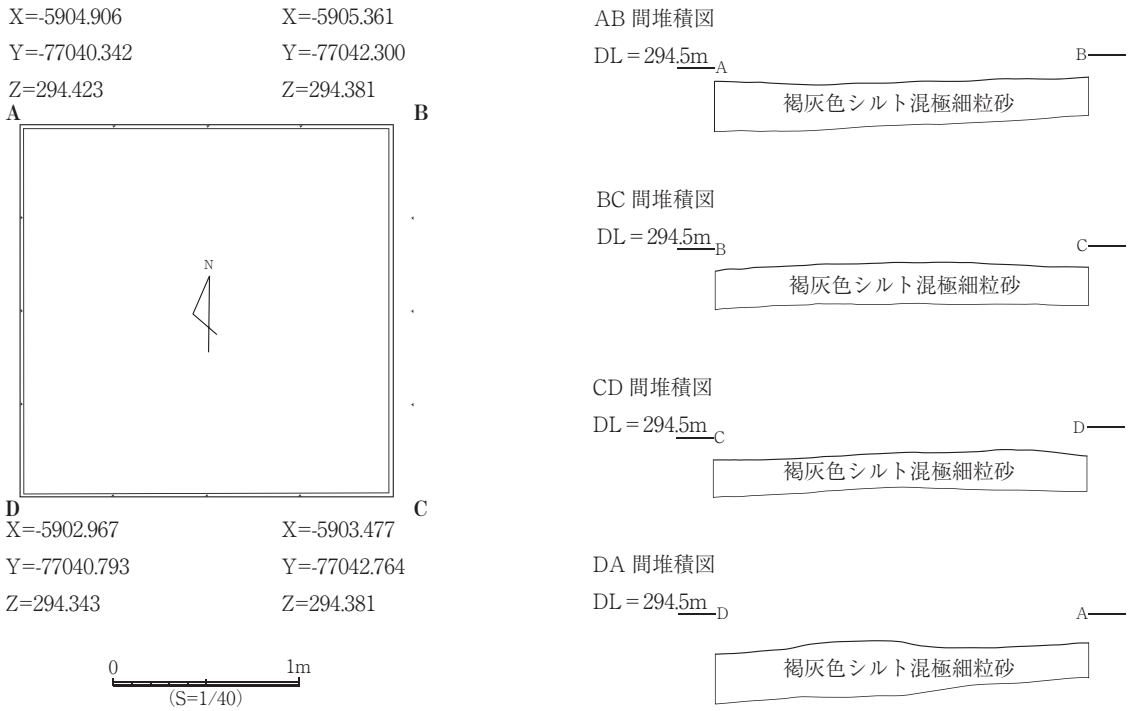


Fig.10　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 2 平面及び土壌堆積図

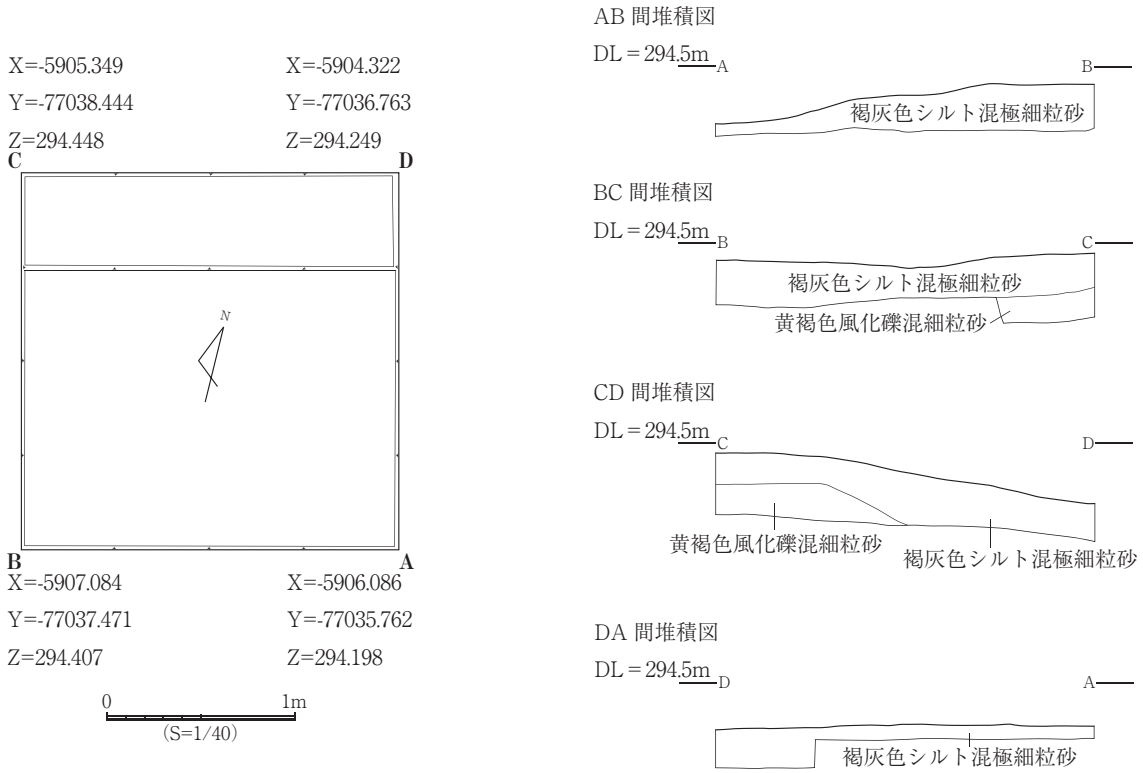


Fig.11　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 3 平面及び土壌堆積図

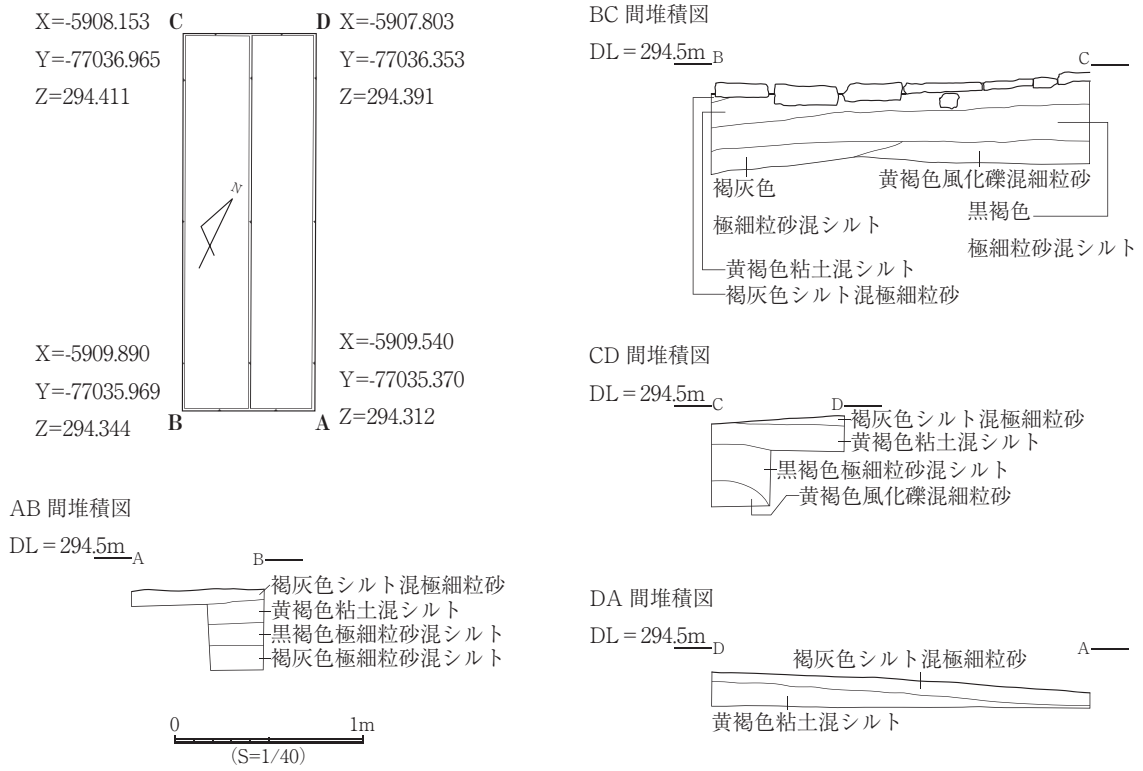


Fig.12　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑 4 平面及び土壌堆積図

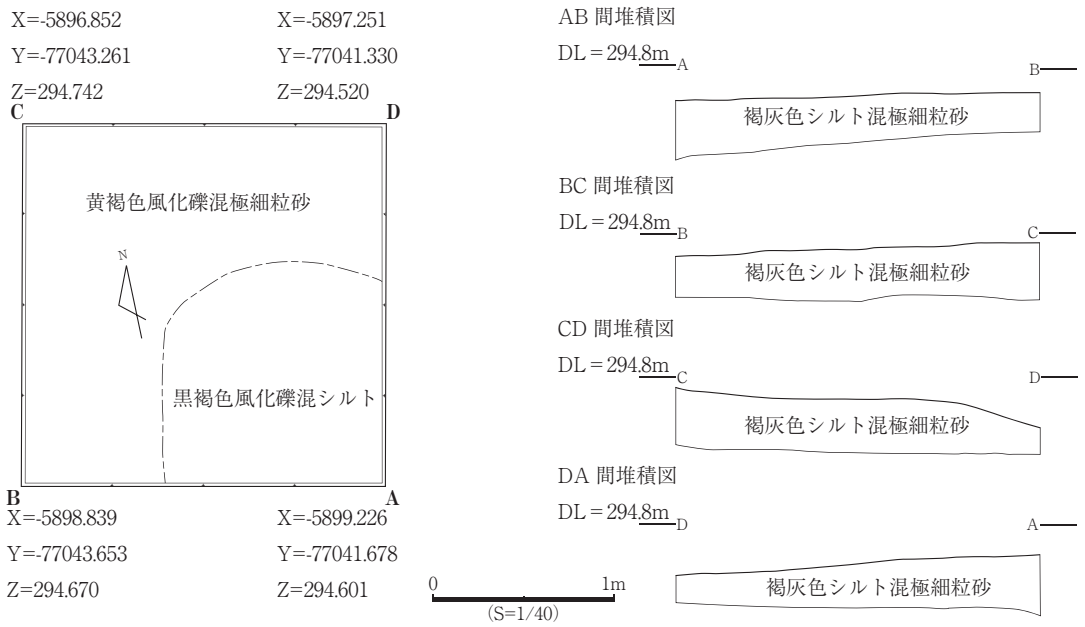


Fig.13　国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡　試掘坑５平面及び土壌堆積図

６．総括

試掘坑４のBC 間土壌堆積図で確認できるように、黄褐色風化礫混細粒砂は地山由来の土壌であって、その上に茶屋跡西で行った切岸によって生じた土壌で盛土造成を行なっている可能性が極めて高い。その盛土の上に、表面積の大きい平らな石を配置しており、それらを基礎石とすることで茶屋は建てられたものとして考えられる。平らな石の上に積石があるのはその証左であろう。

また、試掘坑２と３及び５においては、表土直下で黄褐色風化礫混極細粒砂が検出できたのに対して、試掘坑４では坑のほぼ中央から南でその検出レベルが深くなっている。土壌堆積もＣからＢへと傾斜しており、特に中央付近からＢに向かって傾斜が強くなっている。

このことは、試掘坑４付近から、北から南へと下がる谷地形があることを示しており、Fig.8 で図示した地形図とも調和する。この傾向は、試掘坑１の土壌堆積からもうかがうことができる。

試掘坑１においては、腐葉土の除去後に黄褐色粘土混細粒砂を確認した。この土壌は、砂粒の大きさが揃っており、硬質であったため、人工的なものである可能性が考えられた。このため、土壌の成り立ちを探るために黄褐色粘土混細粒砂を掘り下げたところ、有機物を含む黒褐色細粒砂混シルトと、地山に由来すると考えられる黄褐色細粒砂混シルトを検出した。これらの土壌のしまりは不良であり、傾斜する土壌堆積が認められたことから、谷地形を埋めた土壌であると判断できる。この弱い土壌の上に黄褐色粘土混細粒砂を用いて三和土のような硬い地盤を形成することで、遍路道から茶屋へ繋ぐ道の整備を行ったと考えられる。

このような整備は、伊予土佐間の人と物の行き来が活発であったが故に行われたのであって、調査地で採集された「高知病院」銘のガラス瓶（写真図版 PL.7）は、そのことを指し示している。

文献　明治 14（1881）年 「縣道並木新規植付見込」（愛媛県行政文書　愛媛県立図書館蔵）
藤田儲三　1997 「松尾峠の伊予国境碑はいつ建てた」『土佐史談』第 206 号 ,132・133 頁 , 土佐史談会
井上淳　2018 「松尾峠から観自在寺」『古地図で楽しむ伊予』,112-115 頁 , 風媒社

第Ⅱ章　平成 29 年度町内遺跡試掘確認調査

1. 増田2045-1他

調査対象地　増田 2045-1, 2046, 2047-1, 2048-1, 2049, 2054, 2055, 2056-1, 2057-1, 2058, 2059, 2060, 2061, 2062, 2065, 2113, 2114, 2115, 2116, 2117, 2118, 2119-1, 2158-1, 2159-1, 2160-1, 2161-1, 2162-1, 2163, 2164, 2165, 2166, 2167, 2168, 2169, 2178, 2179

調 査 原 因　太陽光発電施設の設置

調 査 所 見　調査地は、三森（867.1m）から南へ伸びる山塊の丘陵上に所在する。

地名は中屋であって、そこにおいては周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていないものの、ナイフ形石器の他、縄文時代早期の土器片や石斧そして石鏃が表面採集されたという記録がある。（一本松教委 1994、木村 2003）

調査の結果、埋蔵文化財は確認できなかった。しかし、アカホヤである可能性が高い火山灰が比較的良好に堆積している地点があったため、本調査地近隣の丘陵等の地形においては埋蔵文化財が所在する可能性を考慮しておく必要がある。

文献　一本松教育委員会　1994 『茶堂Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

木村剛朗　2003 「25. 中屋遺跡」『南四国の後期旧石器文化研究』, 284・285 頁 , 幡多埋文研

Fig.14　増田 2945-1 他　位置図

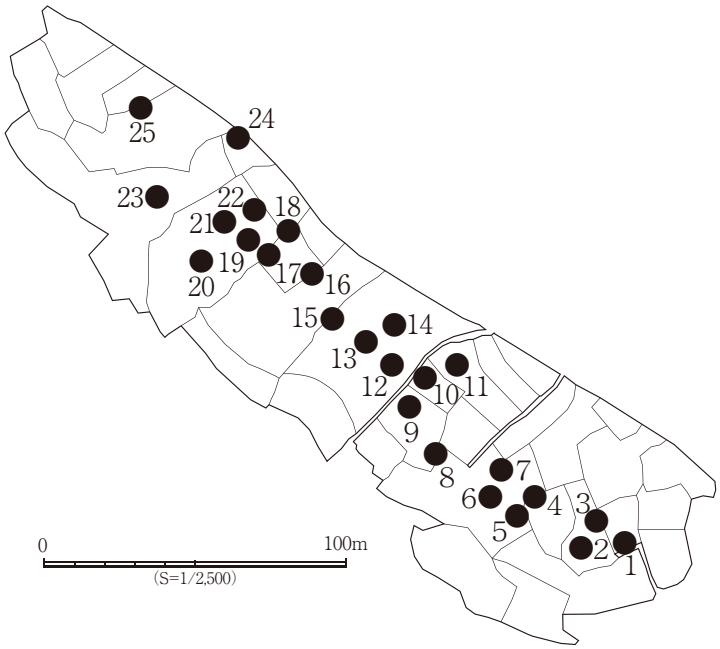


Fig.15　増田 2945-1 他　試掘坑位置図

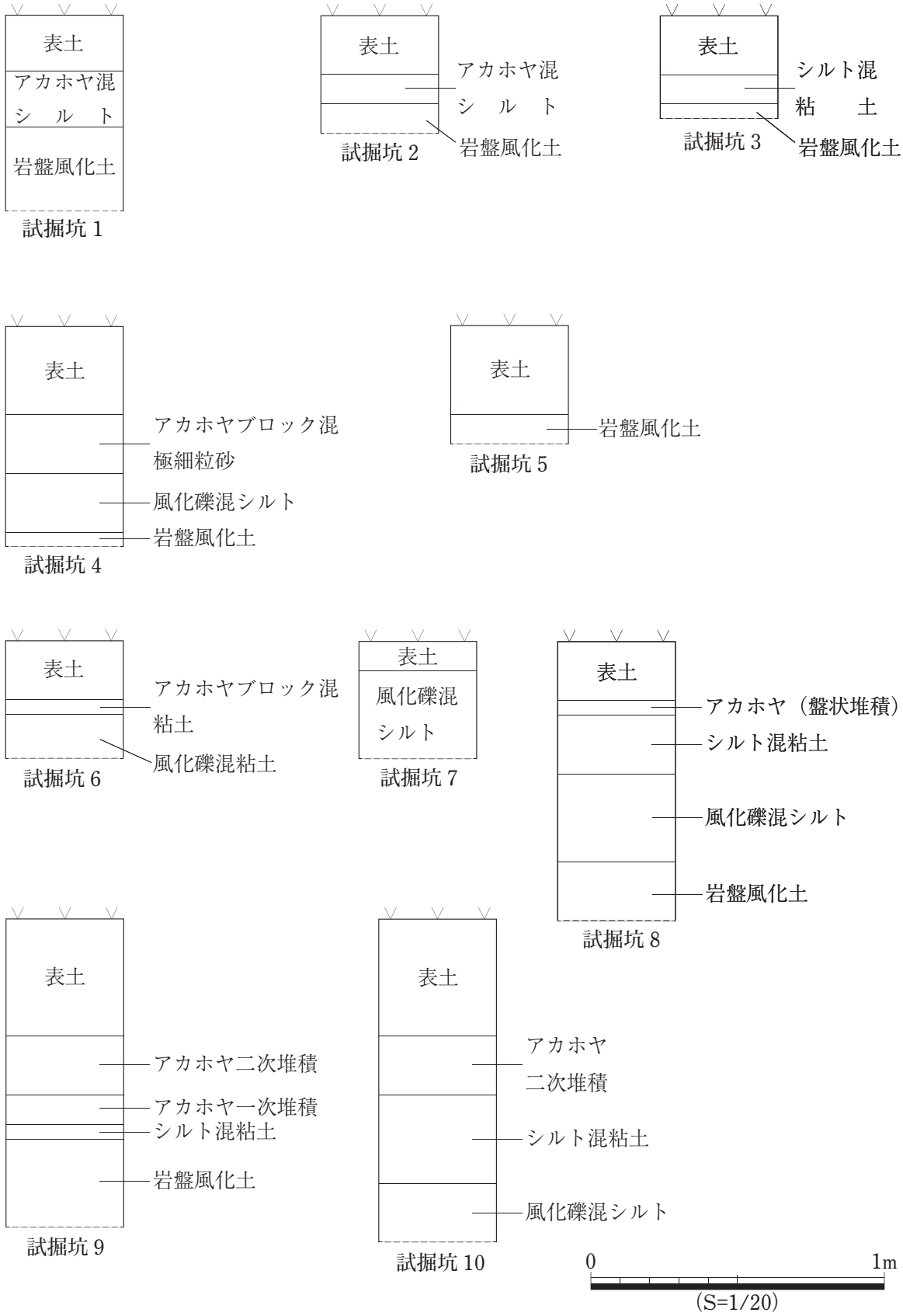


Fig.16　増田 2945-1 他　試掘坑土壌堆積図 1

Fig.17　増田 2945-1 他　試掘坑土壌堆積図 2

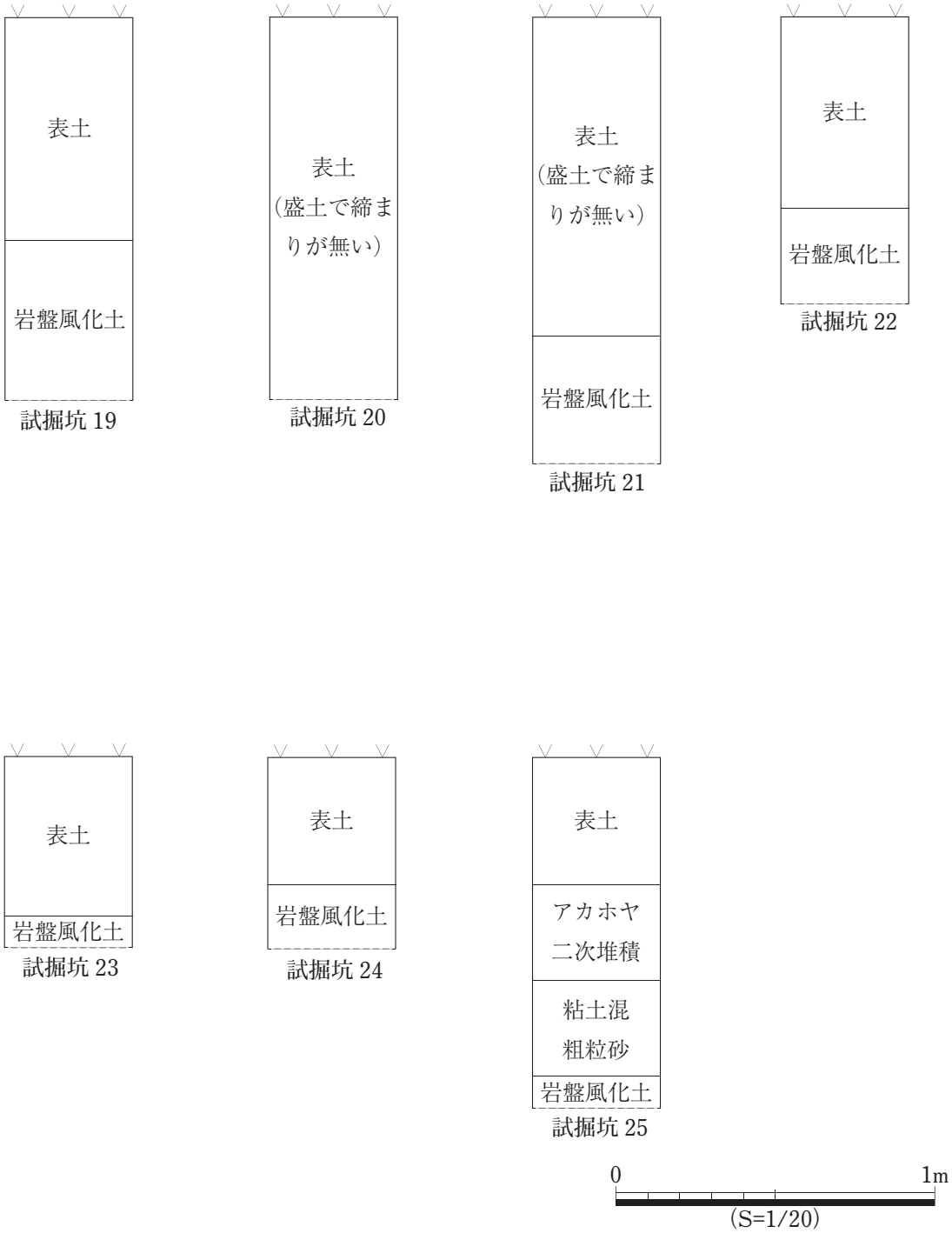


Fig.18　増田 2945-1 他　試掘坑土壌堆積図 3

2. 御荘平城1257-3

調査対象地　御荘平城 1257-3　　調査原因　個人住宅の建築

調 査 所 見　調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されている「貝塚遺跡」の近隣に所在するため、調査を実施した。

調査の結果、埋蔵文化財の所在は確認できなかったものの、基盤として考えられる5層以下の土壌は、水成堆積により形成されていることを確認することができた。

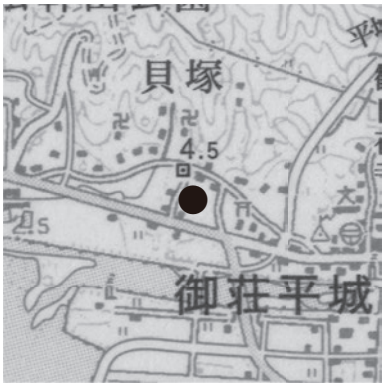


Fig.19　御荘平城 1257-3　位置図

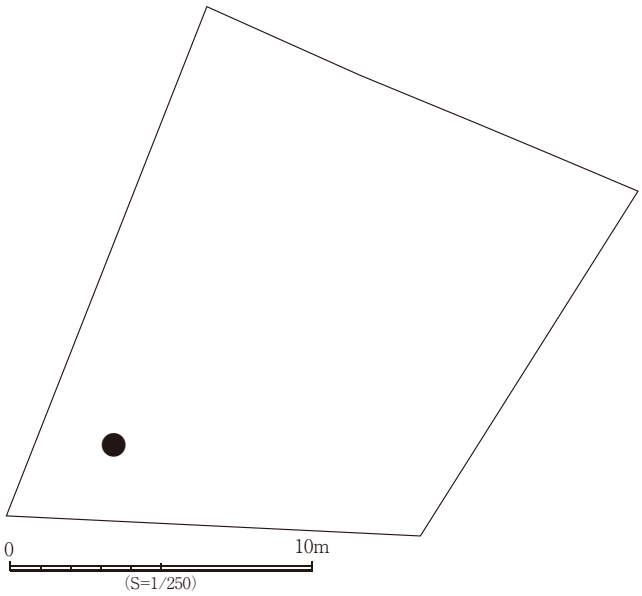
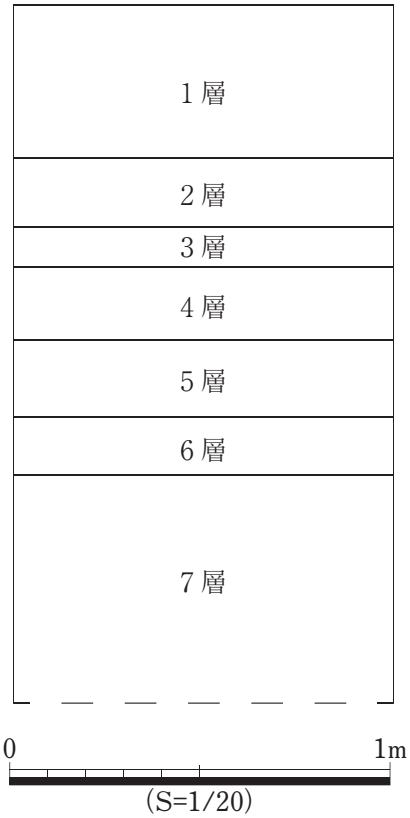


Fig.20　御荘平城 1257-3　試掘坑位置図



1 層：赤褐色の礫層であって、造成土。

2 層：明黄褐色の中礫混細粒砂層であって、造成土と考えられる。

3 層：褐灰色の小礫混粗粒砂層であって、耕作土と考えられる。瓦片が混じるため、近世以降の堆積の可能性が高い。

4 層：黄褐色の細粒砂混シルト層で、褐灰色粘土をブロック状に含む。耕作土として考えられ、瓦片が混じるため、近世以降の堆積の可能性が高い。

5 層：明赤褐色の細粒砂層で、ラミナ状の堆積が認められる。白色極細粒砂を縞状に挟むため、水成堆積の可能性が高い。

6 層：明赤褐色の粗粒砂混礫層で、小規模な土石流による堆積である可能性が高い。

7 層：明赤褐色のシルト層で、白色シルトを縞状に含む。水成堆積である可能性が高い。

Fig.21　御荘平城 1257-3　試掘坑土壌堆積図

3. 御荘深泥348-1 ～ 3 他

調査対象地　御荘深泥 348-1 ～ 3·397-4

調 査 原 因　太陽光発電施設の設置

調 査 所 見　調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されている「深泥遺跡」（町指定史跡）と「深泥Ⅱ遺跡」の近隣に所在している他、周知の埋蔵文化財包蔵地としては指定されていないものの、姫島産黒曜石製の遺物が出土ないしは採集された地点があるため（多田 2018）、調査を実施した。

調査の結果、埋蔵文化財の所在は確認できなかったものの、試掘坑２において黒褐色粗粒砂混シルトの堆積が確認できた。

この堆積物については古土壌の可能性があるため、調査地周辺の丘陵頂部においては、埋蔵文化財が所在する可能性を考慮しておく必要がある。

文献　多田仁　2018「第３節　姫島産黒曜石の交易　第２章　縄文時代」『愛南町史』, 29 － 34 頁 , 愛南町

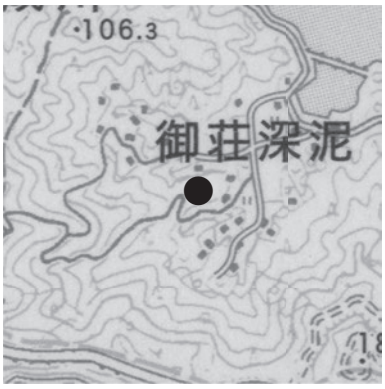


Fig.22　御荘深泥 348-1 他　位置図

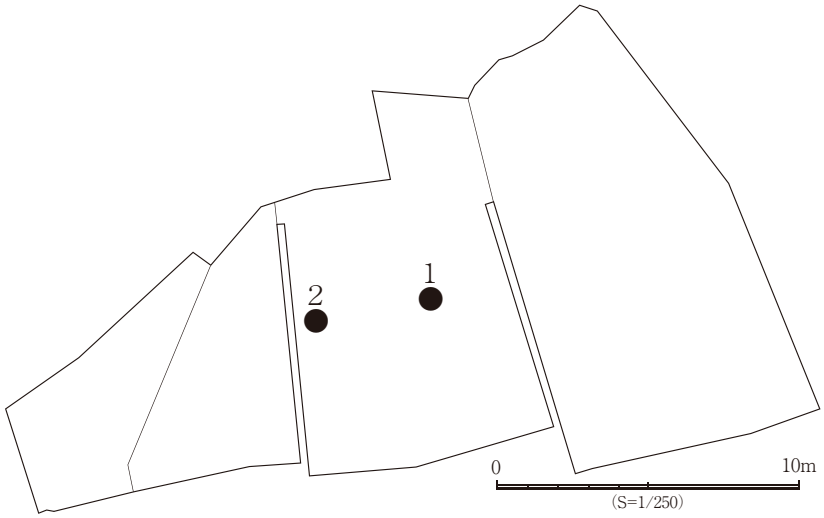


Fig.23　御荘深泥 348-1 他　試掘坑位置図

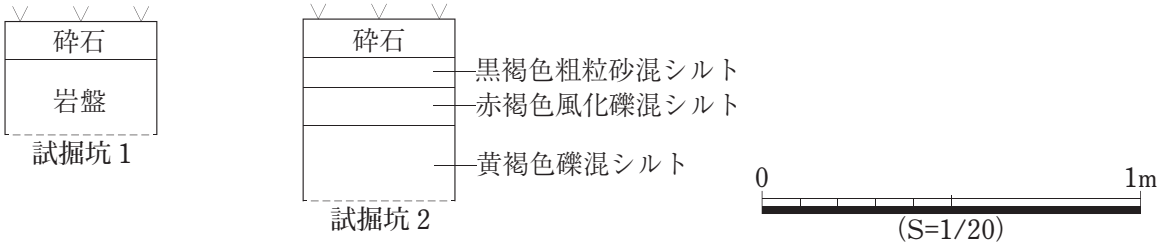


Fig.24　御荘深泥 348-1 他　試掘坑土壌堆積図

4. 御荘深泥622-1

調査対象地　御荘深泥 622-1

調 査 原 因　太陽光発電施設の設置

調 査 所 見　調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されている「深泥遺跡」（町指定史跡）と「深泥Ⅱ遺跡」の近隣に所在している他、周知の埋蔵文化財包蔵地としては指定されていないものの、姫島産黒曜石製の遺物が出土ないしは採集された地点があるため（多田 2018）、調査を実施した。

調査の結果、埋蔵文化財の所在は確認できなかった。土壌堆積は、青灰色粘土より上においては盛土であって、現在は耕地や宅地として使用されている。

この青灰色粘土は、御荘湾とそこに注ぎ込む谷により形成されたと考えられ、縄文海進時には浅いながらも陸地に深く入り込んだ海浜または入海が広がっていたと考えられる。

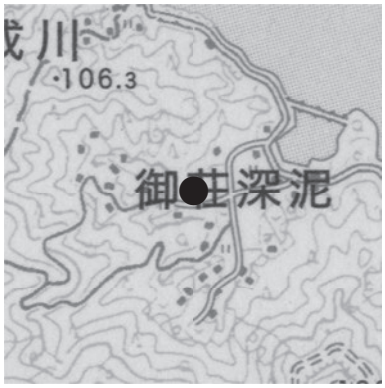


Fig.25　御荘深泥 622-1　位置図

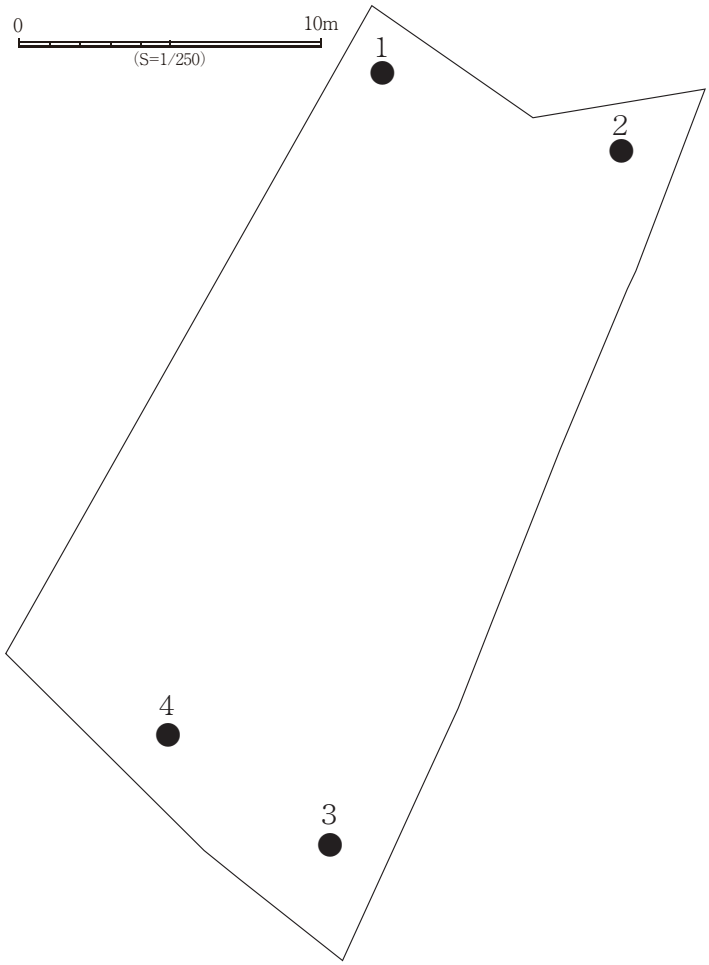


Fig.26　御荘深泥 622-1　試掘坑位置図

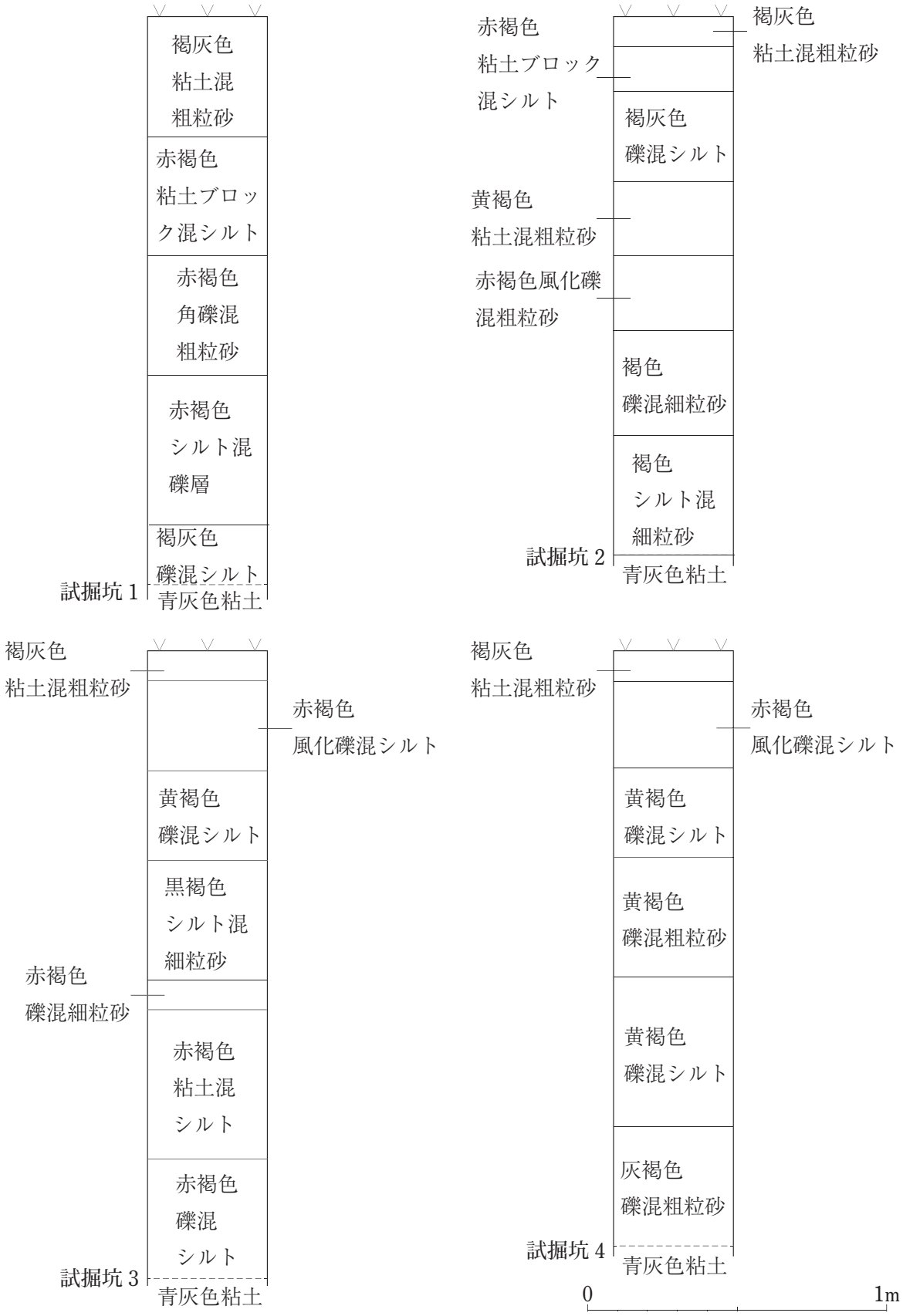


Fig.27　御荘深泥 662-1　試掘坑土壌堆積図

5.御荘深泥 252-1

調査対象地　御荘深泥 252-1

調 査 原 因　太陽光発電施設の設置

調 査 所 見　調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されている「深泥遺跡」（町指定史跡）と「深泥Ⅱ遺跡」の近隣に所在している他、周知の埋蔵文化財包蔵地としては指定されていないものの、姫島産黒曜石製の遺物が出土ないしは採集された地点があるため（多田 2018）、調査を実施した。

調査の結果、埋蔵文化財の所在は確認できなかった。しかしながら、試掘坑 1 と 6 においてアカホヤの二次堆積が認められたことから、丘陵部にはその一次堆積が所在すると考えられると共に、試掘坑 3 で確認できた炭化物を多く含む土壌については、人為的なものである可能性を考えておく必要がある。

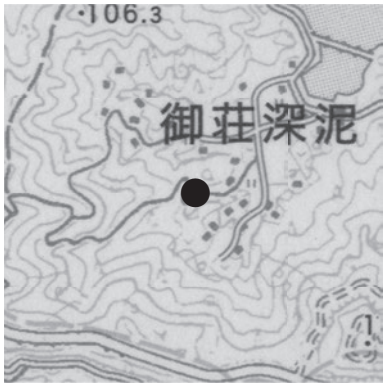


Fig.28　御荘深泥 252-1　位置図

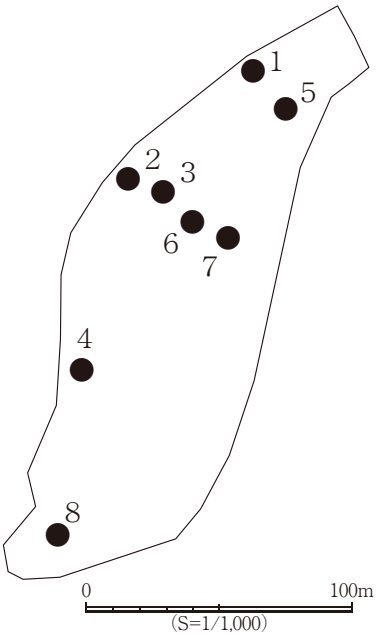


Fig.29　御荘深泥 252-1　試掘坑位置図

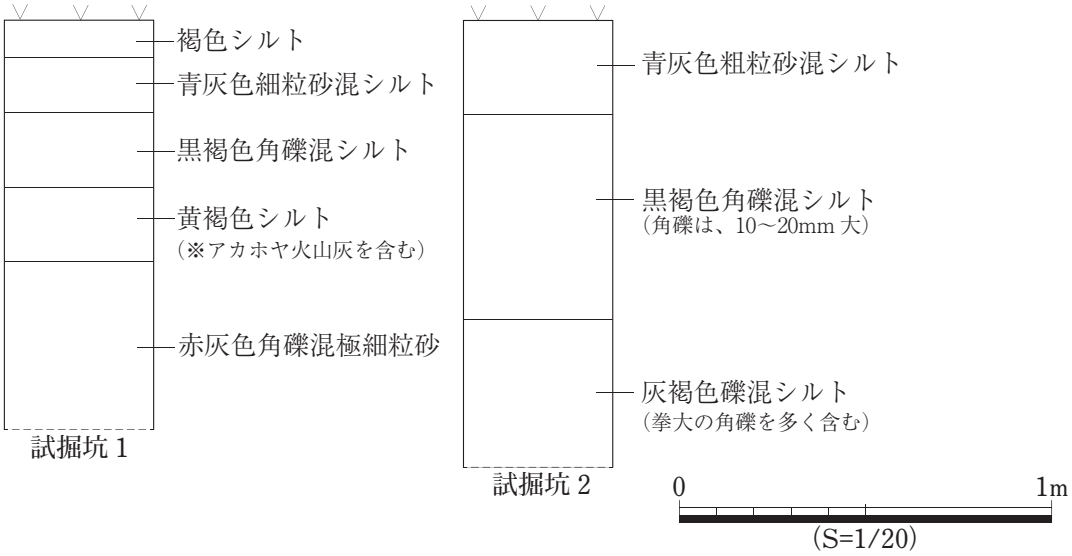


Fig.30　御荘深泥 252-1　試掘坑土壌堆積図 1

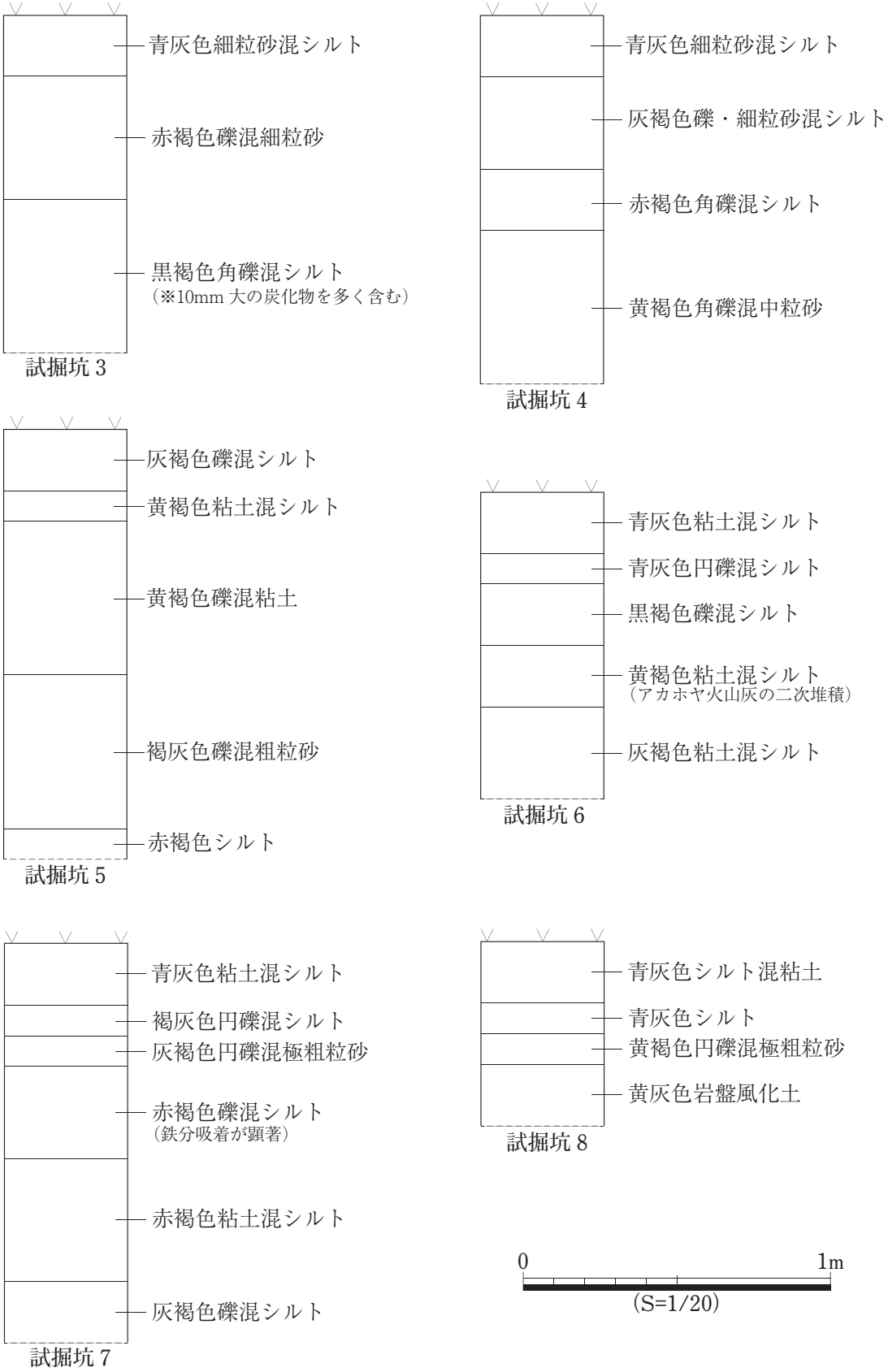


Fig.31　御荘深泥 252-1　試掘坑土壌堆積図 2

写　真　図　版

国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡試掘確認調査　着手前（高知県側より）

国史跡伊予遍路道観自在寺道　茶屋跡試掘確認調査　着手前（愛媛県側より）

PL.2

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 1 完掘

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 1
DA 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 1
DA 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 2 完掘

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 2
AB 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 2
DA 間土壌堆積

PL.4

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 3 完掘

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 3
AB 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 3 調査風景

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 4 完掘

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 4
BC 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 4
BC 間土壌堆積近接

PL.6

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 5 完掘

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 5
AB 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道
茶屋跡試掘坑 5
DA 間土壌堆積

国史跡伊予遍路道観自在寺道　試掘確認調査採集　ガラス製品（薬瓶　銘“高知病院”）　銘面

国史跡伊予遍路道観自在寺道　試掘確認調査採集　ガラス製品（薬瓶　銘“高知病院”）　目盛面

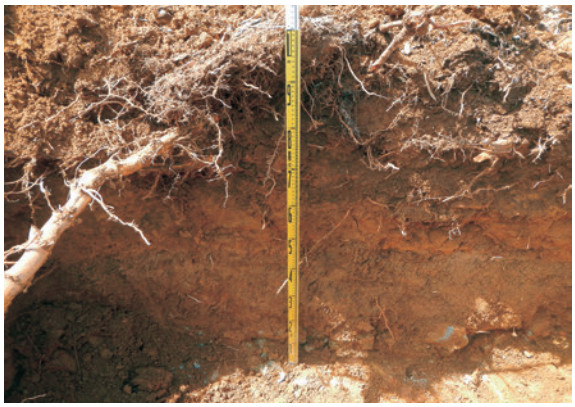
PL.8

増田 2045-1 他　調査着手前風景 1

増田 2045-1 他　調査着手前風景 2

増田 2045-1 他　試掘坑 1 土壌堆積

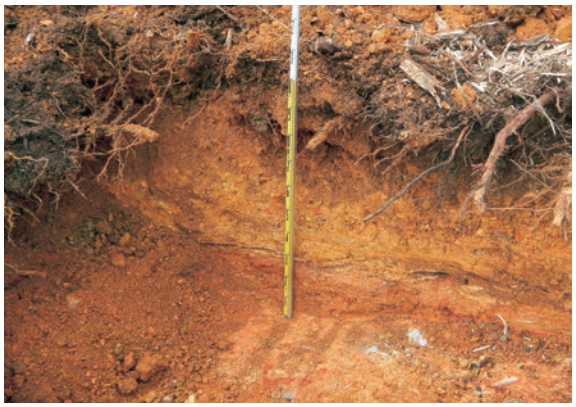
増田 2045-1 他　試掘坑 9 土壌堆積



増田 2045-1 他　試掘坑 10 土壌堆積

増田 2045-1 他　試掘坑 13 土壌堆積

増田 2045-1 他　試掘坑 17 土壌堆積



増田 2045-1 他　試掘坑 25 土壌堆積

御荘平城 1257-3　試掘確認調査着手前風景

御荘平城 1257-3　試掘坑土壌堆積

御荘深泥 348-1 他　試掘坑 1 土壌堆積

御荘深泥 348-1 他　試掘坑 2 土壌堆積

御荘深泥 622-1　立地風景

御荘深泥 622-1　試掘坑 1 土壌堆積

御荘深泥 622-1　試掘坑 2 土壌堆積

御荘深泥 622-1　試掘坑 3 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 1 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 2 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 3 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 4 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 5 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 6 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 7 土壌堆積

御荘深泥 252-1　試掘坑 8 土壌堆積

報告書抄録

<table>
<tr><td>ふりがな</td><td colspan="8">あいなんちょうないいせき1</td></tr>
<tr><td>書　　名</td><td colspan="8">愛南町内遺跡1</td></tr>
<tr><td>副 署 名</td><td colspan="8">・国史跡伊予遍路道観自在寺道　・平成29年度町内遺跡試掘確認調査</td></tr>
<tr><td>巻　　次</td><td colspan="8"></td></tr>
<tr><td>シ リ ー ズ 名</td><td colspan="8">愛南町文化財調査報告書</td></tr>
<tr><td>シリーズ番号</td><td colspan="8">第1輯</td></tr>
<tr><td>編著者名</td><td colspan="8">松本安紀彦</td></tr>
<tr><td>編集機関</td><td colspan="8">愛南町教育委員会</td></tr>
<tr><td>所 在 地</td><td colspan="8">〒798-4120　愛媛県南宇和郡愛南町城辺甲2420</td></tr>
<tr><td>発行年月日</td><td colspan="8">令和2年2月28日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ふりがな
所収遺跡</td><td rowspan="2">ふりがな
所在地</td><td colspan="2">コード</td><td rowspan="2">北緯</td><td rowspan="2">東経</td><td rowspan="2">調査期間</td><td rowspan="2">調査面積</td><td rowspan="2">調査原因</td></tr>
<tr><td>市町村</td><td>遺跡番号</td></tr>
<tr><td>国史跡伊予遍路道観自在寺道</td><td>愛媛県南宇和郡愛南町小山</td><td>38506</td><td>69-008</td><td>33°94′39″</td><td>133°67′61″</td><td>2017.5.2～2017.7.31</td><td>3,993.51㎡</td><td>町内遺跡確認調査</td></tr>
<tr><td>所収遺跡</td><td>種別</td><td>主な時代</td><td colspan="2">主な遺構</td><td colspan="2">主な遺物</td><td colspan="2">特記事項</td></tr>
<tr><td>国史跡伊予遍路道観自在寺道</td><td>古道</td><td>近世・現代</td><td colspan="2">遍路道　茶屋跡</td><td colspan="2">近現代陶磁器・瓦</td><td colspan="2">四国西南地域における伊予土佐間の主たる往還道。</td></tr>
<tr><td>要約</td><td colspan="8">国史跡伊予遍路道観自在寺道は、通称“松尾坂”ないしは“松尾峠”として知られている。
この峠は、戦国時代より伊予と土佐の国境として強く意識されており、それぞれの麓に番所が置かれていたことからもうかがえる。
近世以降は、四国遍路そして四国西南地域における伊予土佐間の主たる往還道として機能しており、今回確認した愛媛県側の茶屋跡の他、高知県側にも茶屋があったことはその証である。</td></tr>
</table>

本書作成データ

ハ　ー　ド：iMac (Retina 5K, 27-inch, 2019) 3 GHz 6 コア Intel Core i5
システム：macOS Catalina（10.15）
ソ　フ　ト：Adobe Creative Cloud（Photoshop, Illustrator, InDesign）
　　Office Home&Business 2019（Word, Excel）
フォント：モリサワ OTF 基本７書体 , TimesItalic
デ　ー　タ：Macintosh Full DTP で入稿

用紙

表紙：レザック '80　つむぎ銀鼠　四六判 Y 目 210kg
力紙・内裏表紙：タント P-58　四六判
本文：HG 書籍紙イエロー　A 判 72kg
写真図版・報告書抄録・奥付：V マット　A 判　90kg
※本文と図版の用紙は、古紙 80% の再生紙を使用した。

愛南町文化財調査報告書第 1 輯

愛南町内遺跡 1

・国史跡伊予遍路道観自在寺道
・平成 29 年度町内遺跡試掘確認調査

2020 年 2 月 28 日

発行　愛南町教育委員会
〒 798-4120
愛媛県南宇和郡愛南町城辺甲 2420
電話　0895-73-1112
印刷　有限会社 大成社